

---

# 戦国少女

亜紀内 司

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

戦国少女

### 【Nコード】

N7160X

### 【作者名】

亜紀内 司

### 【あらすじ】

時は江戸。  
浅川家第8将軍が住む坂兎城の庭番の少女は、今日も夜を駆け抜ける。

基本はコメディです\*恋愛はもう少ししたら本格的になるかと；；  
評価、感想、お気に入り、とても嬉しいです（、、＃）  
よろしく願います…！！！！！！

## 姫と庭番（前書き）

この作品は実際の団体、歴史の流れ、歴史上の人物とは一切関係ありません。

## 姫と庭番

深夜の静まり返った江戸の町に、無数の足音が響き渡る。

「いたぞーっ！捕まえろー！！」

袴の擦れる音と刀の揺れる音がやけに五月蠅く感じるのと言つまでもない。

彼等が追っているのは1つの影。

それは、お庭番と呼ばれる存在

忍者だ。

「あははっ！遅い遅い！ちよいいな！」

影は高笑いをしながら、民家の屋根から屋根へと飛び打つる。

お庭番としてはあまりにも派手な行動…いや、発言だが影は特に何も思わない。

しばらくして追っ手の音がなくなると、影は急にピタリと止まり路地裏へ飛び降りる。

「ここまで撒けば、もう来ないな。はあー…疲れたなあ…」  
やれやれと言った風に首を回す。

「あ、そうだ！早く里志さとしに報告しなきゃっ」  
急に何かを思い出したようにはっ、と顔を上げると、自らが戻る城に帰ろうとする。

しかし

「はあー…。まさか浅川あさかわ家の庭番が女だったとは…」

上から声がしたかと思うと、両腕を右手で捕まれ、羽交い絞めにされる。

「……………っ！お前はっ！華党家の庭番か…！！」

さっきまで緩み切っていた表情が一気に硬くなる。

「離せっ！！！消え失せるこの屑野郎っ！」

浅川家の庭番、浅川 あさかわ さとみ 里美は女とは思えない発言をした。

自分の状況下を分かっているのか分かっていないのか…あまりにも態度がデカイ。

「…あのさ、お前、自分の今の状況分かってる？」

華党家の庭番は少々呆れる。

「とにかくっ！私を離せっ！」

そう言いながら里美は隠し持っていた煙玉（睡眠薬入り）を身体をくねらせ落とす。

「うわっ！！」

流石にいきなりの事に驚いたのか、華党家の庭番の手が緩む。

「隙ありっ！」

そんなセリフ言わずにさっさと両腕を抜いたほうが早いとは思うのだが、里美は言いながら両腕を抜いた。

「せこい…なんて女だ…」

「女なんて庭番始めたときからとくに捨ててるっっの…！」

煙の届かない場所に移動しながら舌を出す。

「うわっ！最低だな？！女の言う事か？」

「五月蠅いなあ…。そんなモン私の自由だろうっ」

庭番はお互いに干渉してはいけない。

この二人はその掟を忘れているらしい……………。

いや、覚えていたとして、完璧に無視している。

「アンタ面白いなあ！オレあ弥甲 やいづみ 陽一 やういち っっんだ！アンタは？」

「は？うーん…私はだなあ……」

彼女が本名を口走りそうになった時、遠くから追っ手の足音がした。

「あー…また今度なっ！見逃してくれてどーも陽一さん？」

里美はそういうと、一瞬でその場から立ち去った。

彼女がいなくなると、華党家のお庭番、陽一は夜空を見上げた。

その瞳は、さっきまでとは打って変わって冷徹そのものだ。

「……………あれが、浅川家の姫…ねえ…」

彼の呟きは、夜風に吹かれて、消えた。

## 姫と庭番（後書き）

どこかでクスリ、とでもアハハとでも笑っていただけると嬉しいです\*

ジャンルは恋愛ですが、自分的にはコメディーを主にしたいなあと思っています。

文がおかしいのは目を瞑ってやってください（）

## 浅川の人間（前書き）

前回までのあらすじ

浅川家の庭番である、浅川里美は姓を見れば分かるとおり、浅川家の姫だった。



## 浅川の人間

一仕事終えた、浅川<sup>あさかわ</sup>の庭番、里美<sup>さとみ</sup>は夜の町を徘徊していた。

さつきまで、城に戻ろうとしていたようだが、気が変わったらしい。  
今の季節、夜はかなり冷え込むが、桜がもう満開だ。

夜桜と言つのも風流があつていいだろう。

「はあー」

丁度桜の木の近くにあった石に腰をかけると、ゆっくりと空を見上げる。

ひらひらと、程好い速さで散っていく桜の花弁<sup>はなび</sup>は、儂く、美しい。

そのうちの一枚をタイミングよく右手で掴むと、そっと手を開く。

花弁の薄桃色は昔彼女の好きだった色だ。

里志<sup>りし</sup>怒るかなあ……

その花弁を見つめながら考えに耽<sup>ふけ</sup>る。

まあ今日は独断で勝手に行動しちゃったし流石に怒るな……。  
なんで弁解しよう……。里志、私が嘘付いてもすぐ見抜くんだよなあ  
……！！

悶々と考えていると急に肩に布のようなものが落ちてきた。  
バツ、とそちらを振り返ると、同じ年で同じ庭番の狭巳<sup>はなみ</sup> 雅也<sup>まや</sup>がいた。



「そうか」

里志はそう一言告げた。

あれ？やけに簡単に終わった？

やった！と里美が思ったのも束の間の事。

「……………だけでこの僕が許すと思います？姉上」

ダメだった。

## 浅川の人間（後書き）

最初は里志の性格、シヨタ系（？）wにしようと思っていたのですが、ちよつと変更なのですよww

Sですね。ツンデレ…かどうかはまだwww

『白鬼戦将軍』と呼ばれる少年（前書き）

自らの弟、浅川家第8将軍 浅川 里志に呼び出された里美。  
果たして、彼女は里志の説教から逃れる事はできるのか…？

…前書きからしてなんかギャグっぽいのは気のせいです…きっと…。

## 『白鬼戦將軍』と呼ばれる少年

「いや…その…少しでも里志様のお役に立とうと…」

広い広間に浅川家の庭番の声だけが響く。

弟の機嫌を少しでも直そうと試みる里美。

頭を下げているので、里志からは見えないが、目が完全に泳いでいる。

「僕は姉上がお庭番の第1部隊隊長になる事自体反対だったのですが、それをここにいる馬鹿家臣…ではなかったな…佑助<sup>ゆうすけ</sup>によって嫌々任命しました。それは姉上も承知のはず」  
自らの弟に説教をされる姉。

さぞかし滑稽な光景だが、將軍と庭番（…いや、本当は姫なのだが…）の立場を考えれば別におかしくもない。

「それをなんですか…。佑助は“隊長は部下を使ってどっしり構えていれば良いのですから、里美様が働く立場にはなりませんよ”などと言っていたのに実際どうです姉上？聞くとところによると、いつもいつも…“巡回”など言っては江戸の町を堪能して来ているよ…うで……」

浅川家8代目將軍の説教は全く先が見えない。

「この間、姉上の侍女が隠し戸を見つけて、姉上が江戸の町で買った物がいろいろと出てきたようですが。どう弁解しますか？」

（げっ……、紗子<sup>さこ</sup>の奴チクつたな…）

頭上で流れる説教を聞き流しながら、いつも身の回りの世話をしてくれる侍女の顔を思い出す。

「ああ、余談ですが姉上、紗子は僕になにも告げ口などしていません

んよ。僕にそれを教えたのは、丁度その場面を見てしまった、ここにいる佑助です」

…読まれていた。

「それで？姉上、なにか僕に言いたい事がありますか？」

「……………」

この後、里志の説教があげばのまで続いたのは言うまでもない。

）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）  
）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）

ここで、里美姫の弟、つまり浅川家8代目将軍である、浅川里志について触れてみようと思う。

両親はある事件に巻き込まれ他界し、弱冠10歳で“将軍”という地位についた彼は、今年で16になる。

彼は唯一の血の繋がりがある姉を大切に思っており、実はかなりの過保護だ。

無茶苦茶に見えて、彼の合理的な策は誰でも思いつくものではなく、数々の名のある将軍達を踏み潰してきた。

そのおかげで今まで全くと言っていいほど黒星がない。

そんな彼についた名は『白戦鬼<sup>はくせんき</sup>将軍』。

どんな戦いでも白星を獲る将軍、という意味らしい。

何故鬼が付くかといったら、きっと彼の性格にあるのだろう…。

そんな彼が今、攻略に苦戦しているのが華党家だ。

華党家の12代目将軍は、里志と同じ頭脳派らしく、浅川家とほぼ互角だ。

まだ戦争は、していないものの、浅川家と華党家がぶつかれば、多くの被害は免れない。

農民までもを氣遣う里志の性格が、人望が厚い理由の一つとも言えるだろう。

浅川 里志とはそういう男だ。

[illegible]

「あー……疲れた……そして……眠い……」

里美はそう呟きながら自らの部屋へと向かう。

そつと襖を開けると、自分に良く似た顔の少女、秋宮あきみや千春ちはるが待っていた。

彼女は所謂、里美の替え玉だ。

と、言っても里美よりは1つ下の15だが。

「お帰りなさいませ、御姉様」

この里美大好き少女は彼女の事を『御姉様』と言って慕っている。

「ただいま、千春。何もなかったか？」

高く結ってあった髪を解きながら、自分にそっくりの彼女を見る。

「特に何も御座いませんでしたわ。あ……そういえば、紗子様が来て“里美様、申し訳ありません”。何故か里美様のコレクションが將軍にばれてしまったらしく、この紗子……どうすればよいのやら……」

「と言っておりましたわ」

わざわざ声音を変えながら、嬉々として話す千春。里美と話すのが



よっぽど嬉しいらしい。

「御姉様のコレクションとはなんの事でしょう?」

につこり、と満面の笑みを浮かべながら、尋ねる千春。

「それは…その…」

“巡回”という名の“江戸満喫作戦”(作戦とも言いがたいが、里美が勝手に命名した)の事を千春に言ったらどうなるかは予想がつく。

『わぁ!素敵ですわ!私も一度やってみようかしら!!!!』  
という事になる。

千春は里美よりも、よっぽど“姫”という立場に合っているのだが、里美の率いる浅川家庭番第一部隊の中の一人だ。

つまり忍者であって、城から抜け出すのは容易いことである。

「……その…。…そう!!今まで城の敷地内で見つけた綺麗な石のコレクション!!」

普通に考えてこんな言い訳、赤子でも思いつきそうだが里美は特に恥じらいもせず言い切った。

そして、普通に常識のある人間なら、ここで“仮にも姫がそこらへんの石を集めるか?…”という考えに辿りつくのだが、千春は違ったようだ。

「まぁ!素敵ですわね!!今度私もやってみようかしら!!!!」  
目を輝かせて、まるで女神でも見ているかのような彼女は、里美に尊敬の眼差しを送る。

彼女には“常識”の“じ”の文字もなかったらしい。

『白鬼戦將軍』と呼ばれる少年（後書き）

文章がぐたぐたなのは毎度のことなのでご勘弁をっ（殴

評価、または感想・アドバイスなどいただけたら泣いて喜びます\*

## 替え玉の少女（前書き）

弟の説教を明け方までくらった里美。

その後自らの替え玉である千春と雑談をする。

## 替え玉の少女

「そういえば御姉様、最近江戸の町では武士狩りという物がうろついているようですが御存知ですか？」

里美の黒い艶やかな髪を櫛で梳かしながら、鏡に映る彼女の顔を見る千春。里美は端麗な顔を顰<sup>しか</sup>めていた。

「その様子だと、御存知ないようですね…。えっと…どこから御話すればよろしいでしょうか？」

「最初から、私みたいな馬鹿でも分かるように頼む」

姫が言う言葉とは到底思えない。仮に、ここに彼女の侍女である紗子がいたら「姫様！そのように自分を低く見せるのは御止めください！貴方は高貴なお方なのですよ？そのように頭を下げるなど言語道断！！！」と言いつつだが、流石千春と言うべきか。

「御姉様は決して馬鹿ではありませんわ！！！ただ幼少の頃から武術に力を入れていた為に少ばかり人と遅れをとってしまっただけですし、それに御姉様なら今すぐ勉学に励めば里志様の頭脳など越えてしまいますわ！！！」

よくまあそこまで褒め言葉が思いつく、と彼女の事を良く知らない他人は思うと思うがこれは千春の本心だ。

少々息を荒くしながら力説していた千春の表情はとてもいきいきとしている。

「それに御姉様は私に<sup>わたくし</sup>武術と礼儀作法を教えてくださいましたわ！  
！そんな御姉様が勉学を出来ないはずないじゃないですか！！！御姉様は私と違って有能なのですから！！！」

「分かった、分かったから千春。武士狩りの話、してくれないか？」

このままだと里志の説教以上に時間がかかりそうだと、思った里美が千春の話（というより力説）を遮る。

「あ、申し訳ありませんわ、御姉様…」

さっきまでの勢いはどこへやら…シユンと縮んだようにさえ見える。「別に怒ってないから大丈夫だ、千春。で、武士狩りの話をしてくれ」

“千春”と呼ばれたことが嬉しかったのか、ぱつ、と顔を輝かせると、急に声音を変えて話始める。

「最初の被害者は城の近くにある替大橋で武士狩りに会ったようです」

千春の話からすると、どうやら『武士狩り』とは全身黒尽くめの男か女かも分からない庭番らしき者が、帯刀をしている武士に勝負を挑み、次々と倒し、帯刀していた剣を盗っていくものらしい。

その武士狩りの者は、いつ出没するか、どこで出没するか不明な為、江戸の町は今、あまり人が出歩いていないという。

一通り話を聞いた里美は、ふと、目の前にある鏡を…自分を見た。鏡の中の自分は微かに笑っていた。急いで無関心な表情を取り繕う。

「その武士狩りの人、強いんだな」

「そうですね、結構名のある武士も倒しているようですわ。まあ倒すといっても殺しはしないですね。不思議ですわ」

江戸も物騒になったものですね、などとぼやきながらもしっかり

里美の髪を梳かす千春。

「よし、決めた」

「？御姉様、今なにか言いましたか？」

「いや、何も言っていないぞ？」

いかにも「何の事だ？」という表情をしながら、内心危ない危ないと思っている里美だった。

思ったことを口に出してしまうのはお庭番としても、里美本人としてもあまり良くない事だ。

「あ、そうだ、千春」

「はい。なんでしょう、御姉様？」

櫛を棚にしまい、里美の横に座る形でいる千春。

「私は今日からまた、江戸の町を夜間巡回する」

意味は分かるな？と里美が千春に目配せする。

「お任せください、御姉様。この千春、死んでも御姉様の替え玉はやめませんわ！！」

恐ろしい事を言う少女だ。

替え玉の少女（後書き）

千春はかなり天然です。

## 少年の悩み（前書き）

替え玉兼部下である千春から“武士狩り”の話を聞いた里美。

そのころ、里美を説教した張本人、里志は自らの姉が原因で悩まされていた。



# 少年の悩み

千春の話聞いた里美は、布団に潜るも寝付けなかった。

早く朝にならないか、とまるで、今で言う遠足へ行く前の小学生のような気分だった。

空は白んできているのだが、まだ鳥が鳴かない。

「はあ……」

意味も無くため息をつく。

そして、唐突に昨夜会ったばかりの華道家の庭番：確か、弥甲やこう陽一よういちと言ったか…を思い出した。

「そういえばアイツ、強そうだったなあ……」

一戦交えたかった、などとのんきなことを考える。

あの細腕であの腕力ならかなりの戦闘力を持っているいそくだ。

里美は期待に胸を膨らませる。

華党家の庭番なら、また会う機会もあるだろう。

そう自分の中で区切りをつけると、急に眠気が襲ってくる。

薄れていく意識の中、鳥の鳴く声が聞こえた気がした。

S  
S  
S  
S  
S  
S  
S  
S  
S  
S  
S  
S

）  
）

「まったく…姉上はどうしてあゝも危なっかしいのだ…」

里美を一刻程（今でいう約2時間です）説教した里志は、ゆっくりとため息をついた。呆れている、というよりは姉の身をとても心配している。

そんな彼の姿を見られるのはきつといつも彼と共にいる家臣である、神無<sup>しんな ゆうすけ</sup> 佑助<sup>ゆうすけ</sup>だけだろう。

「お言葉ですが、里志様」

彼の問いかけに、佑助が口を開く。

「里美様は少しでも貴方様のお役に立とうとお思いなのであります。…他の姫君を見てください。何もせずに、なんでも男に任せつきり…。することと言えば、力のある名家に嫁ぎ、人質のような存在になるだけです」

他の城の姫が聞けば憤慨するようなセリフをさらりと言う。

「……なら私はそのほうが良かったよ、佑助」  
家臣と話すときは一人称が“私”らしい。

「そうでしょうか？……まあ貴方がそう仰るのなら、少々勉学でも学ばせてみては如何<sup>いかが</sup>です？」

あのお転婆<sup>おてんば</sup>姫が大人しく勉学に励むかどうかは別として。

「……佑助…姉上が勉学を大人しくやっってくださいと思うか？」

妥当な判断だ。

「いえ、全く思いません」  
即答だった。

「……………はあ」

日付が変わってまだ少ししか経っていないが、この白鬼戦將軍が姉が原因でため息をついたのはこれで20回目だろう。

「將軍、そんなにお悩みにならなくても、里美様は仮にも貴方様の御姉様です。あの方にもお考えが（多分）あります」

“多分”の部分を心中で言いながら、何食わぬ顔で述べる。

「姉、と言ってもただ単に最初に母上の腹から出たのが姉上だっただけだ。上だ、下だ、というのは関係ないと思うのだが…」

もつともな意見だった。

「そうだ、佑助。少し下がっていてくれないか？一人で考えたいのだが…」

里志が自らの家臣にそう命じる。

「承知いたしました。では、様がお済になりましたら、お呼びください」

佑助はそう告げると、広間をあとにした。

誰もいない広間を見渡す里志。

「……………華党家の犬か…。いるのだろう、出て来い」  
彼がそう言った瞬間、広間の空気が揺れる。

「……………頭脳派將軍、と聞いておりましたが、気配を掴む事もできるのですね」

「そう言いながら現われたのは、華党家の庭番一だった。」

弥甲 陽

「ふむ…貴様が姉上に手を出したという愚か者だな…」

「いや…手を出したって…。どつかの変態ジジイが勘違いしそうな言い方、しないでください」

敬語ではあるが、言葉遣いが少々荒い。

「同じようなものでしょう？」

さらりと言つてのける里志。

「というかその情報どっから…」

「狭巳」

里志が口の中で呟くと、陽一の隣に彼よりも少し小柄な少年が現われる。

「なんでしょう…さとし…さま」

「姉上に手を出したのはコイツだろう？」

主君にそう言われた狭巳 雅也はゆっくりとした動作で隣の陽一を見ると、またゆっくりとした動作で、里志に頭を垂れる。

「はい…この人…でした。さとみ…さまの…うでを…ひねりあげて…いました」

相変わらずなスローペースである。

そして、その言葉を聞いた里志は満足げに頷く。

「ということで、貴様は丁重にお返ししよう……零隊！…この華党

家の犬を追い出せ!!」

『丁重に』と言ったのにも関わらず『追い出せ』という里志。

「「御意」」

どこからともなく、主の命令に答える声がした。

## 少年の悩み（後書き）

里志の家臣は結構毒舌です  
W  
W

## 少女、江戸の町へ（前書き）

ついに念願（笑）叶って里美は江戸の町へ

ちよつと登場人物増えてきたんで後書きの方に、軽く人物紹介書き  
ましたb  
お時間ある方は見てください^^

## 少女、江戸の町へ

目が覚めると、寝る前と打って変わって、辺りは眩しいくらいに明るかった。

「…………ふわぁーあ…………」

かなり寝た気がする。頭がスッキリして、気分がいい。

そういえば……、といつも自分の身の回りの世話をする侍女 紗子はどこだろう、と部屋を見回す。

だが、どこにもいない。

「……………?」

珍しいと思いつつ、試しに名を呼んでみる。

「紗子……紗子おっ……!」

「はい、なんでしょう。……………やっとお目覚めですか、里美様」  
少しの間を置いて、しっとりと落ち着いた女の声が襖の向こうからした。

「あ、いたのか。……………やっとな……?紗子、今は何刻?」

そういえば、いつもの朝より少しばかり暖かい気が……。

「先ほど9つ鐘がなったので……午の刻(今でいう昼の12時くらい)です」

時鐘の数ではなく、何刻か聞かれた為、わざわざ訂正する紗子。

「は……?」

呆けた顔をする、里美。



「だから…午の刻ですって」

部屋の中に入っていいと勝手に判断した侍女は「失礼します」と言  
つて、里美の寢床に近づく。

「ええ————！！！！」

その日一番の大声を上げた里美だった。

[illegible]

「はあ……紗子もなんで、起してくれないんだ……」

江戸の町娘がする格好に着替えながら、横に控えている20代前後の侍女に愚痴る少女。

「いえね、千春ちゃんが姫様は今日、朝帰りだったって言うていたの……」

「……どっかの変態ジジイが勘違いしそうな事、言わないで」

はて、どこかで聞いたセリフだった気が。

「気を悪くしないで下さい、里美様。それよりも町に何の御用で行くのでしょうか？」

興味本位で聞いてくる侍女は、時によつて、厄介な事そのうえな

「え、このタイミングでそれ聞く……？……<sup>かんざし</sup>簪を……そう！簪を見に行きたいんだ！！」

いかにも『今考えました』感が満載の発言。

「へえ…簪ですか…。そういえばこの間里美様『簪なんて女子み  
いで嫌だ！』』とか言っていましたね…。どんな心境の変化で御  
座いましょう…」

完璧に状況を楽しんでいる。

「そゝそんな事よりっ！帯、帯やってくれ！！」  
侍女に帯を突きつける。

… 本当は自分でできるのだが。

「まあ大体予想はつきますけどね……。武士狩りは大変お強いと聞きます。一説では妖刀を持っているとか……。まあ死なない程度に頑張ってください」

お見通しだったらしい。

[illegible]

何日ぶりの江戸の町は、城と違って空気が柔らかい感じがする。

そんな事を考えながら、ゆっくりと道を探索する。

「千春の言う通り……だな」

普段どおりに見えて、少し活気がない。

ふと、ある一軒の店が目止まる。

「……………」

いかにも女子が好きそうな、簪や帯、着物などが綺麗に並べられている。

まあたまにはいいか。

そう思いながら、店に入る。

店の中は、やはりイメージした通りの内装だった。

外に並べられていたのと同じように、たくさんの小物やら帯やら着物やらが丁寧に並べられている。

「簪一つ、五十文（今でいう500円くらい）…？は？安いな？」

「！」  
改めて、その簪を手取る。

細やかな細工は、自分がよくする簪より、技術が高いかもしれない。  
い。

「色合いといい、この技術といい……どんな鍛錬積んだ技術者だ…」

「…」  
ぶつぶつと呟く。

と、その時だった。

「いらっしゃいませ」

若い男の声がした。

振り向くと、目の前に『顔』があつた。

「へ？」

驚いて瞬時に後ずさる。

その様子を見た店の主人が、目を丸くした。

「…申し訳、ございません…。はじめてお客様が来られたので…」  
そう言つて、里美に頭を下げる。

「あ、いや、その…悪いのは私です…。ちょっと驚いただけです。  
貴方が謝る必要はありません」

珍しく敬語を使う里美。

「あの、とりあえず頭を上げてくださいな」

里美にそう言われ、ゆつくりと顔を上げた店主は、想像以上に若かつた。

「失礼ですが…おいくつでしょうか？」

聞かずにはられない。

「今年で19になります」

若っ！！！！想像していた仙人じゃねえっ！！！！！！

里美はあまりの衝撃に驚きを隠せない。

「この物、全部貴方が作ったのですよね？」

とりあえず確認してみる。

「はい、そうですが…なにか不満な点でも御座いましたか？」

恐る恐る、と言つた様子で里美の質問に答える青年。

どうやら自分の腕前に本人は自覚していないようだ。

「いえ、とても素晴らしい細工だった物で、つい魅入ってしまったのです」

里美はそう言って、にこり、と笑う。

褒められた事が嬉しかったのか、青年は「私は最近江戸に来たばかりなので…」と、自分の身の内を話す。

「へえ、そうなんですか。だからこんなに素晴らしいものを作れるのにまだ江戸では無名な方なのですね」

よくまあこんな褒め言葉が思いつくなあ、と自分でも思ったが、本心も混ざっているので特に気にしない。

「いえ、そんな、俺なんてまだまだですよ。……………ああ、失礼」

そついうと、里美に右手を差し出す。

「瀬見谷 弘太郎と申します」  
せみたに ひろたろう

里美は差し出された右手をしっかりと握る。

「里美と申します」

流石に姓を言うのはやめた。

少女、江戸の町へ（後書き）

新キャラ……。

“武士狩り編” 完結する頃にはどれくらい登場人物が増えているのやら……。

では、ここで、今まで出てきた登場人物（軽く）紹介ですww

[illegible]

浅川 里美（１６）……幼い頃から武術を学んでいたおかげで、今は姫兼庭番。人情に厚く、困っている人は助けないと気がすまない性格。男勝りで男口調。理由はきつと彼女の父親にある。かなりの美貌の持ち主でもあるが、本人は気付いていない様子。かなりの鈍感。庭番第一部隊隊長。

浅川 里志（16）…浅川家8代目将軍。里美の弟…と言っても一卵性の双子の為、鬘を被せたら里美になれると言っても過言ではない。幼い頃に両親を亡くしているため、里美を大切に思っている。里美関連の事は容赦ない。所謂シスコン。弱冠10才で将軍という地位に着いた。天才的頭脳を持つ。

神無 佑助（21）：里志がもつとも信賴している家臣。かなりの毒舌だが、主君の考えを第一に優先する。劍の腕前は里美をも凌駕する。つねに里志の傍にいる。実は没落した名家の者。

弥甲 陽一（１７）…華党家の庭番。能天氣で明るい性格の為周  
りから馬鹿だと思われるが、実はかなり頭がいい。女とは本氣  
で殺り合わないのが信条らしく、里美をからかつては逃げる。

秋宮 千春（15）：里美の替え玉の少女兼第一番隊の庭番。里美に良く似た容姿だが里志曰く『里美と雰囲気は全く違う』らしい。里美大好き少女で彼女の為なら死んでもいいと本気で思っている。

猪山 紗子（24）：里美の一番近くにいる侍女。里美を自分の妹のように思っている。里美に似合う着物や小物を買うのが人生で一番の楽しみらしい。彼女の行動については特に何も言わないが、よくからかう。

瀬見谷 弘太郎（19）：“小唄”という名の店の主人。細やかな細工は里美を驚かせるほどの腕前。

## 華党家の將軍（前書き）

ちよつとぐたぐたモード突入っ！！



## 華党家の將軍

里美は、ここ江戸の町に来てまだ10日も過ぎていないという瀬<sup>せ</sup>見谷<sup>みたに こうたろう</sup> 弘太郎に、町の案内役を買って出た。

「ここが江戸で一番の染物屋だ。藍色がすごく綺麗なんだ」  
一軒一軒丁寧に説明していく里美。  
とても楽しそうに話している。

「染物屋かあ。そういえば俺のいた田舎にはなかったな…」  
そして彼女が説明する度に弘太郎が感心したり感想を言ったりしたりしている。

流石江戸だ。  
なんでも揃っている。

「そういえば弘太郎はどこから来たんだ？」  
ふと、里美が疑問に思う。

「どこ…」と言っても多分、里美は分からないと思うけど…。この江戸に来るまで20日はかった」

いろいろと思い出しているのか眉を顰めながら話す。

…旅の途中で何かあったのだろうか？

「20日かあ…大変だったんだろうな。…あ、あそこの団子屋、食べたことあるか？」

団子屋は食べられないから！というツツコミは特になかった。

「いや、ないなあ……。店を開くだけで精一杯だよ」

弘太郎が自嘲気味に笑う。

「じゃあ私が特別に奢おごってやるよ！一回喰くってみろ！！」

「え、いや……」

流石に自分より年下の、しかも少女に奢ってもらうのは気が引ける。

「いいって、いいって！折角、知り合ったんだ！」

困っている人はほっておけない性格の里美はそう言つて弘太郎を強引にも店まで引つ張つていった。

[illegible]

店の中は、とても落ち着いた雰囲気だ。

和み処としてはこれ以上びつたりな所はないと言つても過言ではない。

「あら、里美様いらっしやい」

人の良さそうな笑みを浮かべる、この店の女将が里美に向かって  
そう言った。

「里美様？」

それを聞いた弘太郎が不審げに呟く。

それはそうだ。

16歳の少女に向かって、50前後の女が名前に“様”付けをするのだ。

不審に思っただけだろう。

女将がにこにこしながら「また今日も城を抜け出したんですか？」と言いかけた時、里美は脱兎の如き素速さで彼女の口を塞いだ。

「おばちゃん！ちょっと今、身分隠してるからっ！！」

こそこそと話す里美。

「あらあら、それは申し訳ありません。：元気なことはいいいことですわね。では訂正して、今から里美“ちゃん”と呼びますわ」

そんな会話を済ませると、里美は安心して、何事も無かったように弘太郎に向かって「何の団子食う？」と聞いた。

「あ？……ああ……。うーん……みたらし団子、1本……いいか？」

さっきの女将の発言には一切口を出さないことにしてくれたらしい。

「遠慮しなくていい。おばちゃん、みたらし5本！私はいつも食ってるので！」

席に着きながら、なにやら作業をしている女将に向かって叫ぶ。

「はいはい、分かったわ里美ちゃん」

にこりと微笑みながら、その場をあとにする女将。

その様子を見届けて、里美は目の前に座る弘太郎に話しかける。  
「ここのおばちゃん、すごく優しいんだ。気前もいいし、私の遊び

にも付き合ってくれる」

なんとかさっきの“様”発言を誤魔化したい里美は『遊び』ということにした。

それを聞いた弘太郎がさっきまでの腑に落ちない顔はどこへやら、憑き物が取れたような顔をした。

「ああ、そうだったのか。いきなり“様”だったから。俺、結構ビツクリした」

そう言いながら、からからと笑い出す。

「ゴメンゴメン。私もまだこっこの事、女将が覚えているとは思わなかったんだ」

誤魔化せただろうか…？

内心ひやひやしている里美だが、まあこの反応なら大丈夫だろうと勝手に判断した。

と、その時

「きゃあっ！！」

店の外で女の悲鳴が聞こえた。

「なんだっ？！」

里美が瞬時に店の外へ出て行く。

「あ、おい、里美！」



弘太郎がやってしまったとばかりに額を押さえる。

確か、この人は                   ！！

「ほう…この私に意見するか」

雪夜と呼ばれていた青年が背筋まで凍りつきそんな笑みを浮かべる。

雪のような白い肌に整った顔、銀の髪       それだけ見れば誰でも感嘆を上げずにはいられない美貌の持ち主の青年だ。

そんな彼の殺気で埋め尽くされた瞳に射抜かれて、果たして少女はどうなるだろうか？

その光景を見ていた皆が、そう思った。

好奇心という名の視線を受ける中、里美は思い切り息を吸う。

そして

「お前が誰であろうと関係ないだろう！……！！……！！」

言ってしまった。

の出会いだった。  
これが、里美と華党家12代目將軍、華党<sup>かとう</sup>雪夜<sup>せつや</sup>と

華党家の將軍（後書き）

ついに登場！

華党家現当主！！！！

あれ…將軍って当主って言うていいのだろうか…？（殴



## 氷の將軍（前書き）

華党家12代目將軍に向かつて、無礼な口を叩いてしまった里美、  
一体どうなる？

今回、流血表現（？）ありなので、苦手な方はお戻りください！！

## 氷の將軍

たくさんの人間の視線を浴びながら、里美はそこに立っていた。

目の前にいる青年をきつと睨み付けながら、口を結ぶ。

「くっ……」

ふと、どこからかそんな声がした。

「っ……あははははははははははっ！！！！！！」

どうやらさっきの声はこの目の前にいる青年が笑いを堪えていたものだったらしい。

「な、何が可笑しい?!」

柄にもなく里美が動揺する。

それもそうだ。

さっきまでは両者睨み合っていたのだから、突然笑われたら驚く。

こいつ、正気か……?という顔をしている里美の事などお構い無しにずっと笑っている。

「せっ……雪夜様………」

先程、彼に刀を向けられていた女が呟いた。その目はとても大き

く見開かれている。

だが、次の瞬間

「  
口を慎め、雑魚が」

血飛沫が、上がった。

それと同時に、さっきまでそこにあっただはすの女の命の炎が、消える。

「……!」

野次馬の中にいた何人かはそのあまりにも無残な光景にそのまま失神する。

「お……前……っ!」

里美がやっとの事で出た声でそう言って、懷ふところの中に隠してあった短剣を構える。

「その、女は……何も、していない……!……!……!」

「…一つだけ、愚かな貴様に教えてやろう」  
瞳に鋭い刃を宿した青年が、言う。

「その女は、私が命じた仕事を、3度もしくじった。……それに赤の他人である貴様に我々の事をどうこう言う筋合いは、ないはずだが？」

さつきとはまるで違う、軽蔑する様に口元を歪ませる。

「他人だからなんだ？他人だったら人殺しを見逃してもいいのか？  
貴様、何様の」

里美がそこまで言った時、弘太郎が彼女の口を塞いだ。

「んぐっ?!」

驚いた彼女の耳元で、弘太郎が囁く。

「その人は、華党家12代目将軍だ。里美、命が惜しければここは一旦引いた方がいい」

そう言うと、彼女を解放する。

「つぶはあっ！」

そうか、雪夜…どこかで聞いたことのある名だと思っ  
たが…。

里美が目の前にいる青年を改めて見る。

「どうした、さっきまでの威勢はどこへいった？」

雪夜が里美に向けて刀を向ける。

その時だった。

「雪夜様っ！！！！！」

いきなり庭番らしき格好をした男が顕現した。…この真昼間に。

里美はその顔に見覚えがある。

弥甲 陽一だ。

彼は、一瞬里美を見ると、次に自分の主に「耳をお貸しください」と言い、なにやらこそこそと耳打ちする。

「……？」

里美がその様子を怪訝そうに見る。

「ほお…そうか」

一通り、話が終わったのか、陽一が雪夜から離れる。

すると、雪夜は里美を一瞥いちべつしこつ言った。

「女、感謝しろ。今回だけ愚かな貴様の行為を見逃してやる」

そう言って刀を鞘にしまう。

「弥甲、そいつを始末しておけ」

くい、と顎を動かす。

そいつ、とはさつき雪夜が斬った女のことだ。

「御意」

陽一はそれだけ言うと、一瞬で消える。

女も既にいなくなっていた。

「では、私は帰るとしよう」

大量の野次馬が、さっ、と彼の通る道を開けた。

氷の將軍（後書き）

…流血描写…

スミマセン…

## 過去の記憶（前書き）

目の前の女性を助けられなかった里美は昔を思い出す。

流血描写（？）あります！苦手な方、お逃げください！！！！！！



## 過去の記憶

○ 助けられなかった

里美の頭の中は後悔という言葉で、感情で、いっぱいだった。

無力でただ見ているだけだった自分が情けなかった。

急に視界が眩む。

「つゝ……」

彼女の意識はそのまま深い海の底に沈んだ。

「里美っ！！！！！」

弘太郎が自分の名を叫ぶ声が聞こえた気がした。

[illegible]

「里美様ー！どこですか？里美様ー！！」

いつも聞いている、しかしどこか幼さが残っている声が私の名前を呼んでいる。

ふと自分の両手を見た。

「……？」

小さい。

よくよく自分を見てみると全体的に縮んでいた。

ああ、これは…。

彼女は一瞬で自分の状況を理解した。

これは、夢だ。

しかも自らの幼い頃の記憶だ。

私はこの場面を、景色を、覚えている。

確かこの時、まだ16歳の侍女、紗子とかくれんぼをしていたはずだ。私は8歳。

つまり8年前だ。

すると急に目の前の葉が、がさがさと動く。

「?!」

「里美様、みーつけ!!」

まだ幼さの残る侍女の顔が視界いっぱい広がる。

「…」

里美が口を開こうとした時、急に目の前の景色が歪む。

「っ」

気持ちが悪い。

景色が一変する。辺りは火の海だ。熱い……！

ここは確か、前の城だ。

血生臭い……。

辺りを見回すと沢山の傭兵が死んでいた。

「……里……美……早く……お逃げなさい……」  
急に横から声がした。

気付くと、里美は目の前に倒れている自らの母親の右手を握っていた。

「嫌だ！母様！！里美も一緒にいる……！！」

勝手に口から言葉が発せられる。

「……里美……貴方だけは……逃がさな……ければ……っ……！！」  
母の左腹部からは大量の血が出ていた。

この場面は、覚えている……。

そういえば、私はどうやって、ここから抜け出したんだっけ…？

記憶が、ない……………？

「里美　　に　　家の……………」

母様…？なんて言ってるの…？聞こえないよ…！！！！！！

もどかしい。

そう思った瞬間、辺りは静寂に包まれ、漆黒に染まる。

ここ、どこ……………？

怖い。

素直にそう思った。

怖い、恐い、こわい、コワイ……………！！！！！！

衝動的に両耳を塞ぐ。

『里美様』

声がした。

頭に直接響く、不思議な声が。

聞いたことのない声なのに、何故かどこか懐かしい。

誰……………？

自分の声も、直接頭に響いた。

『名乗りたいのは山々ですが、今はまだその時ではありません』

？どういう…

『お目覚め下さいませ、里美様』

声がそういった瞬間視界が明るくなる。

『また、会える日まで……………』

不思議な言葉を残した、声の主の気配は消える。

彼女の夢は終わった。

## 過去の記憶（後書き）

早く恋愛入りたいなあ……と思いつつも寄り道してしまつ……。

アホの妄想にもう少しお付き合いください（）

## 少年と少年（前書き）

流血表現2話連続で続いたので、ここからはまた（多分）なくなります\*

# 少年と少年

まいっ  
たな……。

弘太郎は隣の部屋で静かに寝ている少女、里美をどうしようかと考える。

送っていくにも家、知らないしなあ……。

あの後、彼女はそこに倒れた。

目の前で人が斬られたから倒れたのではなく、多分彼女の場合はその人を助けられなかったショックでだと思う。例えば、今日会ったばかりの少女だが、とても正義感の強い、親しみやすい子だと感じた。

「はあ……」

自分でも気付かないうちにため息がもれる。

とりあえず、起きるまでそのまま寝かしておこう、と彼が思った。時だった。

店の方で音がしたのは。

[illegible]



「姉上が帰ってこない？」

夕日も落ちて、星が出てきた頃、彼にそう告げたのは里美の替え玉、千春だった。

「はい…。里美様は昼頃に出かけたのですが、私に“夕方には必ず戻る”と約束してくださいました。里美様は、約束は必ず守るお方なので、この千春、心配になって、里志様に取り次いでいただいた次第で御座います」

そう言う彼女の声は震えていた。

里美を止めなかった事を里志に咎められる事を恐れているのではなく、里美の身にもしものがあつたら…！と気が気でないのだ。

「……………そうか…分かった…。あとは任せろ」

里志は千春に「下がってよいぞ」と言うと、「狭<sup>はなみ</sup>巳」と口の中で呟く。

「…なんでしょう…さとしさま」

里志の目の前に、里美の部下である忍者、雅也が現われる。

「話は聞いていたな？姉上が帰ってこない。見つけて連れ戻してくれ」

「はい…わかりました」

里志に一礼すると、瞬時にその場から消える。

「…………姉上、どうかご無事で……………」

彼の呟きは広間に消えた。

）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）  
）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）

最初、店の戸が風で揺れているのかと思った。

しかし、よく考えてみると、今日はそんなに風は強くない。

誰だ…？

疑問に思いながらも弘太郎は、店の方へ行き、戸の前で止まる。

コン、コン…コン、コン…

やはり、誰かが外で叩いているようだ。

「…………どなたでしょうか？」

恐る恐る、戸の外にいるだろう人物に話しかける。

すると、「ここに…さとみ…という…人…いますか？」と返ってきた。

里美の知り合いか…。

内心ホツとしながら、何故ここが分かったのかと疑問に思う。  
戸を開けようか開けまいか悩んでいると、

「ぼくは…そのひとの…しりあい…です。ごあんしん…ください」

と、戸の向こうの人物が勝手に言ってくれた。

まあ本人が“安心しろ”と言っているのだからいいか。

そう思い、店の戸を開ける。

立っていたのは里美と同じ年くらいであろう、少年だった。何故か全身黒ずくめだ。

男にしては、大きな瞳と小柄な体な少年だ。

「やぶん…おそくに…もうしわけ…ありません」

ゆっくりとした喋り方のその少年は、そう言つと「かのじょ…どこに…？」と弘太郎を見た。

「店の奥の方の部屋寝てにいますよ。今日ちよつといろいろあつて、倒れてしまったのでとりあえず寝かせてあります」

嘘は言つてない。

まさか『彼女の目の前で人が殺されて、それがショックで倒れた』などとは口が裂けても言えない。

「…ありがとう」

遠慮なく、店の奥に入っていく少年。  
とりあえず彼について行く。



普段から無表情、無感情、無関心と言われている彼だが、ちゃん  
と意思はある。

言葉が片言なのは、ただ単に人と話すのが苦手なだけだ。  
別に初めからあの喋り方だった訳ではない。

「……………」

抱きかかえている少女の顔を一瞥し、心中で安堵する。  
表情には、出ていないが。

もともと百姓の家に生まれた彼は、里美とは…浅川家の姫とは全  
くの無関係な身分だ。

それが何故、知り合ったかと言ったらそれは里美の城を勝手に抜  
け出す癖が幸いしたのだろう。

彼が里美とあったのは、7歳の時だった。

家の外で一人で遊んでいた時に、里美から声をかけてきたのだ。  
元から人見知りだった彼は、はじめ、里美が話しかけてくる度に  
ビクついていた。

それでも毎日のように来る彼女に少しずつではあったが心を開い  
ていった。

そんなある日、一人で遊んでいた彼の元に来たのは、里美ではな  
く、彼の家付近に住んでいるガキ大将とその取り巻きだった。

人見知りである彼は、一瞬で虐められ、殴られ、蹴られ　　そ

れでも声を上げなかった。

その時、丁度来た里美が雅也を助けた。「お前、強いな」と言いながら。

ガキ大将を殴って、一瞬で泣かしたのだ。

それから雅也は、彼女に懐くようになった。

しばらくして、彼女が浅川の姫という事を知った時は流石の彼も驚いたが、それでももう彼女を恐がりはしなかった。

「……………」

昔の思い出に浸っていると、ふと覚えのある気配を感じ、足を止める。

「……………よういち……………」

少し離れた所に立っていたのは今、浅川家と対峙している、華党家の庭番だった。

「久しぶりだな、雅也」

「なんの…ようだ」

自然と、里美を抱える腕に力が入る。

「いやぁ…その…」

そこで言葉が途切れたかと思うと

「うちの大將がその姫さんを誘拐連れて来いしろっていつからさあ……」

すぐ耳元で声が聞こえた。

「っ……！」

反射的に数歩後ずさる。

しかし、流石に彼女を抱えたままでは戦えない。

雅也は、間合いを詰められる前に、さっと身を翻し、

「あ」

逃げた。

「ちょ、敵に背中見せんなー」

陽一はそう言いながらも、もう攻撃する気はないのか両手をだらんと垂らしている。

どうやら今日はやる気が起きないらしい。

彼は気分で動く庭番だ。

彼の主である華党家将軍には少々扱いにくいだろうと思われる。

一瞬、後ろを振り返る雅也。

「おまえだけは…」

彼の弦きは、誰にも届かずに、消えた。



## 少年と少年（後書き）

サブタイトルが思いつきませんでした（ ）

評価とか感想とかアドバイスとかくれたら泣いて喜びます\*

## 双子の姉・弟（前書き）

ぐたぐたすぎますね……；

思いついたままにいつも書いているので、文章ぐちゃぐちゃであとで自分で見てイライラします……；

## 双子の姉・弟

目を開けると、視界に飛び込んできたのは、自室の天井だった。

「っ……」

布団をそのままに、ゆっくりと体を起すと、寝すぎたせいか、頭痛が酷いことに気付く。

何故、私はここにいるんだっけ…？

記憶がない。

確か、弘太郎と一緒にいて

何だっけ？

よく覚えていない……

思い出そうとすると、まるで何かに邪魔されるかのように、頭痛が酷くなる…。

「姉上」

ビク、として、声のした方を見る。

「……………里志」

自分の声が酷く擦れている事に驚く。

「体調はあまりよろしくないようで…」

いつからそこにいたのかは分からないが、多分、里志はずっと里美の隣に座って、彼女が起きるまで待っていたのだろう。

「全く持つてあなたは、何故こんなにもいつも僕を困らせるんでしょうか…」

彼女の双子の弟はそう言いながら深いため息をつく。

“弟”とは言っても最初に親の腹から出てきたのが里美だったからであって、あまり里志が弟という実感は里美にはなかった。多分、里志も同じだろう。しっかりした性格から考えれば里志が上の方がしっくりくる。

「……………ゴメン…」

何故彼が、こんなにも疲れているのかは、里美には分からなかった。

「謝るなら、初めから町になど行かないで下さい…」

里志はそういうと、自らの姉を抱きしめた。

「?!」

里美は一瞬虚を突かれたような表情をしたものの、そんなに心配してくれていたのか、と思い、そのままにいる。

流石、鈍感。

「姉上」

里志が耳元で囁く。

「天井裏の気配に、お気づきでしょうか？」

弟も気付いていたらしい。

無言で軽く頷く。

「奴等の目的は姉上です。……姉上、忍具はお持ちで？」

そういわれて、自分が始めて寝間着姿ねまきだった事に気付く。

「……………着物の方だ……………」

……………これは、非常にヤバイ……………。

「里志、着物着たいんだけど……………」

じゃないと戦えなさそう……………。忍具がそっちに……………。

最後は語尾が消えそうなほど弱々しかった。

「……………そうですね…今、僕は丸腰ですから…。多分、奴等は僕がこの部屋から出て、姉上がお一人になった時を狙って、出てくるでしょう…。ああご心配なさらず。外で雅也が待機しています」

そう言つて、そつと里美から離れる。

里美は頭痛を堪えて立ち上がると、丁寧に掛けられている着物を急いで着る。

急がなければ…。

幸いにも、まだ天井裏の気配は、里美たちが気付いている事に、気付いていないようだ。

着物の中に忍具があることを確かめる。

「…よし…」

少々雑ではあるが、なんとか着られた。

「では、姉上、僕はこれで」

里志はそう言いながら、ゆっくりとした足取りで部屋を出る。

「ありがとう、里志。次から気をつける」

「約束です」

里志が見えなくなると、気配が動いた。

[illegible]

正直、姉をあのままあの部屋にいさせるのは嫌だった。

しかし、家臣の佑助が「その方がどちらかというと、あまり騒ぎにならない」と言った。

本当は里志も分かつていたものの、姉を一人にするのが嫌で、と  
りあえず彼女の部屋で、目を覚ますまで待つことにした。

彼女の部下である雅也に『さとみさま…ねらわれている…』と聞いたときはまさかとは思つたが、実際、城に歓迎しがたい客は、来ていた。いつもなら零番隊や一番隊が気づいて速攻排除するのだが、運悪く、今日は全く別の任務についてもらっている為、今、城にいる庭番は二番隊と三番隊のみだ。

気配にさえ気付きはしないだろう。

「はあ」

人知れず、  
ため息が零れる。

もちろん、こうも毎回のようにかかる事件で頭を悩まされているというのもその一つなのだが……

どうして姉上はあんなにも鈍感なのか…？

そんな暢気なことを考える時ではないと理解しつつも、そんな疑問が頭を過ぎる。

思えば、昔からそうだった。

最近、彼女の鈍感っぷりにより被害に会ったのは、同盟を結んでいる城の、將軍の息子だった。

宴会の席で、里美に本気で求婚したらしいのが、見事に振られたらしい……。というよりも、彼女は彼が本気で求婚していること自体、気付いていなかっただろう。

『はい？そちらに嫁いで欲しいと？ご冗談を。貴方なら、寄つて来る女子など、10や20ではありますまい？』

と、本気で言っただらしい。

今、考えてみれば、よく同盟が無効にならなかったと思う。

「はあ……」

本日何回目のため息かも分からずに、そのまま回廊を歩いていった。



## 双子の姉・弟（後書き）

しばらくしたら、続きを書くので、完成してません……

ぐたぐたになってしまってきているので勝手に完結させて作品消す  
って手もありますよねwww

## 少女、敗北す（前書き）

前の話とちょっと間が出来てしまったので、ちょっとおかしいかもです。

## 少女、敗北す

里志が出て行くと同時に、部屋の天井裏から音もなく、いくつかの影が降りてきた。

その瞬間、外で控えていた雅也が勢いよく入ってくる。

「華党家の庭番か」

さつきとは打って変わって低めの声で威嚇する里美。

「……………」

もちろん相手側は黙っている。

普通の庭番の反応は、こうだ。

そう…普通なら……

「よお、姫さん！久しぶり！！」

その場の空気にそぐわない声音の少年は、しかし目だけは友好的な色がまったく見えない。

「陽一か…。お前、私の正体知ってたんだな」

ゆつくりと様子を伺っている陽一の部下を目線で追いながら、彼に敵意を向ける。

「おお、怖い怖い。折角の美人さんが台無しじゃあねえか」

おどけて見せているが、まったく隙がない。

「それにさあ、俺、姫さんと初めて会ったのって夜だったじゃん？  
ぶっちゃけまったく顔見えてなくて、どんだけ美人かわかんなか…  
っ」

彼が言い終わらない内に、里美が攻撃を仕掛ける。

手裏剣を彼の部下の足元にいくつか刺し、相手を怯ませる。

その隙に、大将…つまり陽一に短剣で攻撃を仕掛ける  
はずだったのだが……………

「姫さん、甘すぎるよねえ…。それで俺に勝てるんでも？」

ピキ…ツ…と嫌な音がした。

「何っ…?!」

「さとみさまっ！……！」

彼女は自らの持つ短剣の刃が折れてしまったことに驚愕する。

こいつ…素手<sup>すて</sup>で折りやがった…。

ふっと彼女の口元に笑みが浮かぶ。

それは、自らの甘さに自嘲している様だった。

丁度その時、運悪く、頭痛がした。

「　　っ」

その隙を見抜いた陽一は鳩尾を素早く殴ると、そのまま倒れこむ彼女を受け止めた。

一瞬、彼女がまだ16歳の少女だという事を思い出す。細くて白い腕は、今にも折れそうな程、弱々しく、壊れ物でも扱っているかのような感覚に陥る。

「……よし、任務完了っ！おーし、お前等ー撤収するぜー」

陽一が、今人をさらおうとしている者とは思えないほどの明るさで、そう告げる。

「そっいえば、雅也くん？」

部屋の隅でありえないほどの殺気を漂わせながら自らを睨んでいる少年に声をかける。

「いいの？姫さん、連れてっちゃうけど？」

「……さとしさまの……めいれい……ぼくは……したがっ……ばんけん……にとって……かいぬしの……めいれい……ぜったい」

「……………」

浅川の將軍は一体何を考えているんだか。

そう思いながら、彼はその場をあとにした。

少女、敗北す（後書き）

急いで書いたのでggaggaggです（ww

あとで修正します!!

## 姫と華党家（前書き）

華党家の庭番・陽一に誘拐された（？）里美。

果たして、どうなる？

テストが終わりPCがまたできるようになりましたので、更新速度も絶好調になるかと（殴



## 姫と華党家

目が覚めると、見知らぬ部屋の高い天井が視界に広がった。

「……？」

意識が朦朧とする。

……流石に自分の身に何が起こったかは理解できていたが。

そういえば、また前の奇妙な夢を見た気がするが、覚えてはいない。

頭痛を抑えながら、ゆっくりと身体を起す。

（なんだってこんなに頭痛がするんだ……）

自分に呆れるように、そっと溜め息をつく。

状況確認をしておかなければ……。

「すーみーまーせーん……。誰かー、いま  
すかー」

精一杯声を張り上げる。

「はい、何でしょうか」

声はすぐに襖の向こうから返ってきた。

女の声だ。

「あの、ここどこでしょう？」

とりあえず自分のいる場所は、確認しておこう。

「ここは華党家本拠、すいなる慧生城の敷地内、西の離れで御座います」

スラスラと答える侍女らしき女に少々感動しながら、里美は丁寧に枕元に置かれていた、自分の忍服を着る。

「……………これって所謂、軟禁って奴ですよね？」

「そうですね」

「……………」

即答された。

「外に出たいなーと思ったり…」

「ダメですね」

随分頑なな侍女らしい。

よし、今からその襖の向こうの顔を拝んでやろっじゃないか……！

そつと襖に近づき、スパーンと軽快な音を立てて襖を開ける。

「随分お元気な姫君ですね」

そこには30後半から40前半と言ったところだろう女が、済ました顔で正座をしていた。

「……………」

期待はずれな反応をされた里美が少々いじけたのは言つまでもない。

）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）  
）　　）　　）　　）　　）　　）　　）　　）

偶然里美に会いに行つた千春が、里美が城の中のどこにもいない事に気付いてしまい、里志の所へ蒼白になって飛んで言つたのは言つまでもない。

「里美様が、消えましたっ！私、これからどうやって生きていけばいいのですか？！」

……………彼女の第一声はそれだった。

千春に「里美は華道家に連れて行かれた」、とそっけなく言つと、物凄い形相で睨まれたのは言つまでもなく……………

「…ンの人でなし將軍っ！！！！！！！！！！」

…という捨て台詞を吐かれ、その上、城から出て行かれたのは、想定内だった。

……だったが……

「はぁ…」

頭が痛い。

俺だって、好きで里美を誘拐させた訳じゃない！

そう言いたいのは山々だったが、自分を取り乱してしまっただけで元も子もない。

今は、華党家の思惑が分からない。

下手に動く訳にはいかない。

ふと、城下町で起こっている、まだ解決できていない事件<sup>もの</sup>を思い出す。

「姉上、どうか無事でいてください」

そう呟いて、里志はもう一つの問題を片付ける為、その場を後にした。

## 姫と華党家（後書き）

新しく連載始めた小説も、よろしければ読んでくだs（）

これとはちよつと違った雰囲気にしようと努力しました（笑）

<http://ncode.syosetu.com/n6291y/>

まだ話はそんなに進んでいませんが…。

シリアスにしようと思っていたんですが、コメディかなり入ると思います（）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7160x/>

---

戦国少女

2011年11月20日07時09分発行